民主香川

定価　月100円
発行所
民主香川社
高松市藤塚町
３丁目13－14
☎(087)834-7311

自治体キャラバンで社会保障の拡充を

香川県社会保障推進協議会

香川県労働組合総連合や香川県医療労働組合連合会などでつくる香川県社会保障推進協議会（県社保協）が10～14日の間、自治体キャラバンに取り組み、県内16自治体に申し入れを行いました。

高松市では13日、約50人が参加し、市の担当者と懇談しました。

県社保協が事前に提出した、いのち・暮らし・社会保障の拡充と制度の改善を求める「介護・福祉・医療など社会保障の施策拡充についての陳情書」への市からの回答をもとに、参加者が再質問。

「物価高騰やインボイス制度の実施で中小業者の営業と暮らしは厳しい。高すぎる国保料を下げ、傷病手当金や出産支援金など病気や出産時の直接給付の制度創設の検討を」「保育士の処遇改善等の加算でなく、配置基準の見直しを一緒に国に要望してほしい」「低額診療報酬制度を薬局でも利用できるようにしてほしい」「市が先導して認知症にも繋がる、耳の聞こえをよくするための施策を考えてほしい」などと要望が出されました。

日本共産党の岡田まなみ、藤沢やよい両高松市議が同席しました。

日本共産党香川県委員会が県党会議開く

高松市で16日、日本共産党香川県委員会は第67回県党会議を開きました。

中谷県委員長は、総合計画を提起し、「総選挙後に政治の流動的大激動が生まれ、『新しい政治プロセス』を前進させるために日本共産党のたたかいと躍進が決定的だ」と報告しました。

討論では18人が発言。①参院選で比例候補5人の勝利への熱い思い、②香川でもすすむ戦争する国づくりの問題、医療・介護、教育などでの深刻な事態、③要求対話・アンケートの楽しい実践が読者拡大の力、④世代的継承では、昨年前進した民青同盟の報告や県委員会の若者対策、⑤丸亀市議選挙、⑥ＳＮＳの重要性と「民主香川」の役割と購読の訴え、⑦全党員参加の党づくりへの決意など、多彩なテーマが語られました。

報告と結語、総合計画が全会一致で採択。40人の新しい県委員を選出し、名誉役員を承認しました。

県常任委員は、中谷浩一委員長、石田真優書記長、白川容子副委員長、赤木玲子、樫昭二、河村整、佐伯守、田辺健一が選出されました。

太鼓台

野菜は高いし、毎月食費も多くかかりますね。2024年、日本でエンゲル係数（家計の総消費支出のうち食料費が占める割合）が、28・3％に上り、1981年以来43年ぶりの高い水準だと総務省の家計調査で分かりました。物価高騰や円安などで食料品価格の高騰、実質賃金の伸び悩み、高齢者世帯の増加などが影響しているとされています。

相対的貧困率を見てみると2021年の貧困線（等価可処分所得＝手取りの中央値の半分）は127万円。「相対的貧困率」は15・4％です。つまり、人口の6人に1人、約2000万人が貧困ライン以下での生活を余儀なくされているという驚きの数字です。そもそも厚労省が国民生活基礎調査での大規模調査が3年に一度で、他は簡易調査です。経済格差をなくす、暮らしや生業を守り、基本的人権の最も大事な「国民一人ひとりの生存権を保障する」という感覚が政府にあるのか、根本的に問い直さねばなりません。（ま）

【3面から】には、B52爆撃機が空中分解し旋回しながら落下。その遠心力によって、完全に運用可能な水素爆弾がノースカロライナ上空に放り出された。広島型の数百倍もの威力を持つ水爆の爆発を防ぐことができたのは、たった1つのスイッチのおかげだった。

★1965年12月5日、米空母タイコンデロガがベトナム北爆から横須賀へ帰航中にB43核爆弾を搭載したA－4E攻撃機が海に落下。事件は沖縄近海（日本の排他的経済水域）で起こったが、米軍は当初日本には事実を伝えなかった。辛うじて核爆発には至らなかったものの、A－4およびパイロット1名とB43核爆弾が失われ、現在も発見されていない。

★1966年、スペイン南部アンダルシア地方のパロマレスという村で、米軍爆撃機が空中給油中に衝突・墜落し、搭載中の熱核爆弾が落下。幸い核爆発は免れたが、ウランやプルトニウムが拡散。住民は深刻な放射能汚染を理由に偏見を受けているとのこと。（2024年8月18日付「赤旗」で原水爆禁止世界大会スペイン代表が詳しく語っています）

アメリカではこれ以降も事故は発生していますが、煩雑になるので省略します。

また、旧ソ連でも、核搭載の原潜に関わる事故の報告は1件や2件ではありませんし、軍用機に関わる事故の情報は持ち合わせていないものの、それも皆無だとはとても思えません。

これらの事故は、幸いなことにいずれも核爆発には至りませんでした。しかしそれは、単に運がよかったからに過ぎません。そして、運はいつか尽きます。

郷土史辞典「笠居郷探訪」（一部抜粋）㉔

報国農園

著者　立山 信浩

戦時中、食糧増産のために未耕地の開墾開拓が全国的に進められた。集団的・組織的に進められた開墾のうち、勤労奉仕隊が集団労働で開墾した開拓地は報国農場とよばれた。また、学校の運動場などにつくられた畑も報国農場とよばれた。報国農場の開墾や農作業のために、国民学校の生徒をはじめ「銃後」のさまざまな年齢層の男女が大量に勤労動員された。

※笠居郷の報国農場は、青峰など五色台の台地上や勝賀山、串の山などの山麓をはじめ、河川の河原、ため池の土手、学校の運動場、寺や神社の境内などにもつくられ、イモ畑やカボチャ畑とされた。昭和19年（1944）には、栗林公園北運動場（現北庭）が報国農場となりジャガイモが収穫された。

※下笠居国民学校の生徒は、五色台上の報国農場で農作業に従事した。五色台上に拓かれた報国農場は、戦後は満蒙からの引き揚げ者の入植地として転用された。

※昭和17年（1942）から満州報国農場の建設のため全国各地から満州報国農場隊（満州勤労奉仕隊）が半年～1年の交代制で満州に入植した。多くは国民学校や青年学校在学中の生徒であった。

「報国農場があった青峰へは、学校から何べん上ったか分らんわ。多いときは毎日上らされた。今日は青峰へ上らんでええという日は、ほっとしたわ。報国農場での仕事は護国芋（ごこくいも）のイモさしが多かった。大きなサツマイモでなんぼでも採れるけど、まずい。もともとは豚のえさ用の芋だったんよ。イモよりもツルのほうがまだうまかった。その上、食うたら必ずへ（おなら）が出る。ナンボでも出る。教室中のみんながへばかりしよったわ」。

「当時、私は旧制高松中学に入ったばかりであったンやけど、授業はなくて、峰山の開墾ばかり。毎日毎日峰山に上がって、畑を作っていた。とにかく石ばっかりで、鍬なンか役に立たン。今の常識では、とても畑と言えるものにはならンかったけど、そんなところでもイモはさした。今でもたまに峰山に上がると、ここも、ここも、あそこも開墾したなアと思い出す」。